

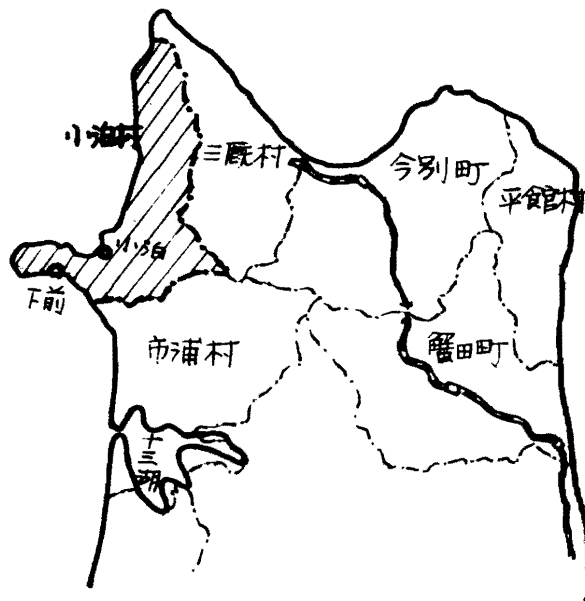
# 北津軽郡小泊村の地理学巡検報告

八幡 衛, 平田 昇一, 根田 克彦, 岩岡 千恵  
奈良岡明子, 東 宏美, 佐々木智子

## 1. 概 観

小泊村は青森県北津軽郡の最北端に位置し、中山山脈を背に、西は日本海に面し、北は竜飛岬、南は市浦村に続く。(第1図) 総面積は64.78㎢で、標高100 m以上の山岳地帯がその67%を占め、村落と耕地は残りの21㎢に押しやられた形になっている。また全面積の96.3%を森林が覆っているが、その92.1%が国有林で営林局が管理し、杉・ひば等の材木を現地で業者に払い下げている。

第1図 小泊村の位置



本村は年間を通してシベリアからの北西風が卓越するが、年平均気温は10.8℃と青森県平均より1℃高い。これは近海を流れる対馬海流の影響であろう。気温は5月頃より急上昇し、8月に最高となるが、その後急速に下降する。年降水量は1,407 mmで7月に最も多く、冬季の積雪は30cm内外である。

歴史は古く、日本書紀にその名がみられると言われ、鎌倉時代には十三湊の外港として海峡を渡る海船が日和待ちしたところと考証されている。江戸時代には有力な漁場として地図

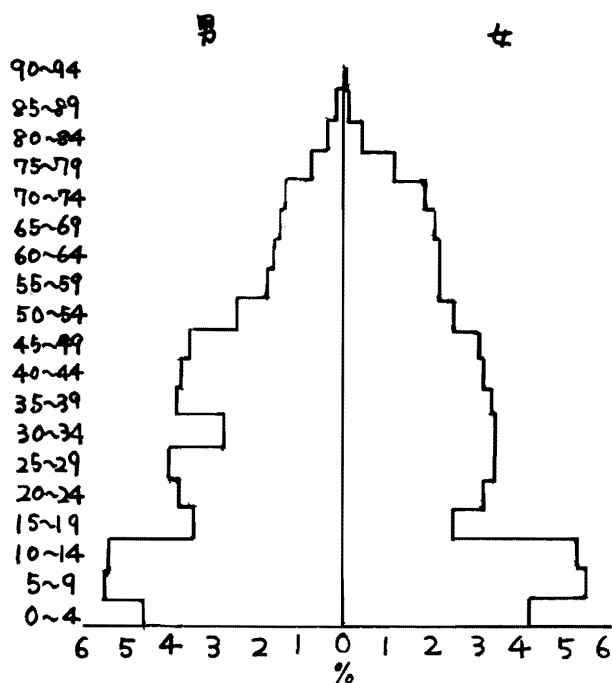
に記され、また港としても津軽藩経済に多大な貢献をしたものと思われる。

その後昭和26年には小泊漁港が避難港（第四種漁港）に指定され、その整備工事が進められている。さらに昭和33年に県立公園、50年には国定公園に指定され、小泊部落では漁港工事の際の埋め立て地の観光道路化など、水産業一色の産業構造から徐々に変貌しようとしている。

#### (1)集落・人口

小泊村は小泊・下前・折戸・裏内の4集落よりなり、総人口は5,988人（昭和51年）である。

第2図 人口ピラミッド（昭50年）



昭和50年の人口ピラミッドは第2図のようになり、15～19才で男女共、30～34才では男の流出が著しい。15～19才の流出は中学卒業後他の町に就職・進学する者が多い為で、30～34才の流出は本村で定職化しつつある出稼ぎのためであろう。

次に昭和35年から5年おきに本村の人口と世帯数をみると、表1・2のようになる。

人口は昭和35年から40年にかけて減少しているが、その後はほとんど変化していない。

表1	人口	表2	世帯数	1世帯の人数	世帯数は僅かながら増加しているが、これは一世帯の平均家族人数からみて、分
昭35	6,004人	1,063戸		5.6人	家が進み核家族化している
昭40	5,879	1,147		5.0	為と思われる。
昭45	5,912	1,282		4.6	また昭和46年から50年ま
昭50	5,917	1,339		4.4	での人口動態を自然・社会

増減でみると、表3・4となる。

出生は減少し、死亡はさほど変化がないが、これは若・壮年層の流出と関係あると思われる。それは転出者数が圧倒的に転入者数より多いことから窺われる。

表3	出生	死亡	自然増減	表4	転入	転出
昭46	136人	43人	93人+	昭46	230(県外111)人	358(県外194)人
昭47	142	44	98+	昭47	270( " 147)	321( " 169)
昭48	112	40	70+	昭48	212( " 101)	307( " 182)
昭49	97	50	47+	昭49	216( " 118)	265( " 126)
昭50	96	43	53+	昭50	219( " 157)	307( " 160)

最後に4集落ごとの人口推移を昭和45年から5年ごとにみよう(表5)。

小泊部落は本村の中心集落で、村役場・派出所・診療所等を独占し、集落中心部にあるバスターミナル付近には商店が集中し、下前・折戸を含む商圈を持つ。しかしバスで2時間ほどの五所川原市商圈の影響で大店舗はなく、従業員10人以上の小売店は農協ストアも含めて2件のみである。他の小売店も日用雑貨がほとんどで、土産品等小物を除き、買回り品はさほど見られない。

下前部落は農業組合がなく、自給作物の畑の他に水田もない漁業の集落である。小泊部落とは日に数本のバスで連絡され、その終起点は本部落の中心行政機関といえる漁業協同組合の建物前にある。商店は点在し、大部分は漁業との兼業である。

この集落では港から続く急斜面に、土盛した家屋が階段状に立地する。家屋の間には木を植えたりコンクリートで固めて段段にするなど工夫をしているが、崖崩れの危険は大きく、現在までその被害はないとはいえ国の危険地帯に指定され、本来は家屋の立地が禁止されている。それでも新築された家は数多く見られ、一応従来よりある家屋の建て直しとして黙認されている。

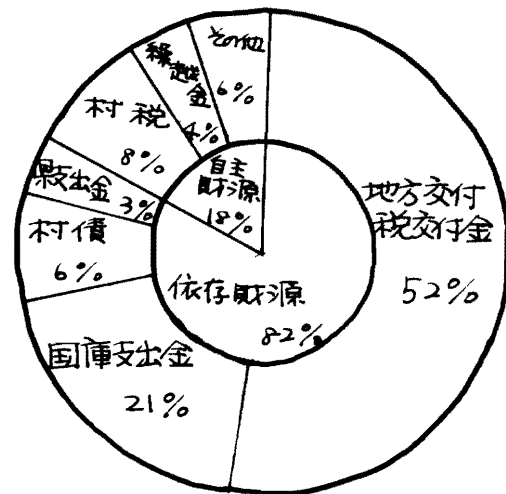
このような急斜面に家屋がある理由は、魚群発見には高所の方が有利であり、その際即出漁できるよう、また常々の整備にも港近くにいる必要があり、離れるわけにいなかったのであろう。本部落最古の名家も山の中腹にある。なお近年港の整備と共に、集落は海岸線沿いに西へ伸びている。

全体としてどの集落も人口変動は少ないが特に折戸・裏内は皆無である。折戸は山と海に挟まれた細い平地に走る一本の道路沿いに家屋が並ぶ列村である。家屋は老朽化し、新築された家は見られない。ここも裏内も、成定期は明確でなく、江戸時代のニシン漁最盛期にできたといわれている。現在両部落とも漁業は営まれず、出稼ぎで暮らしている。

表 5	小泊	下前	折戸	裏内
昭40	3,850人	1,893人	112人	24人(5戸)
昭45	3,870	1,904	"	" ( " )
昭50	3,875	1,905	"	" ( " )

## (2)村財政

当村の財政は、国からの地方交付税交付金(52.2%)や、国庫支出金(21.0%)などで、依存財源と自主財源との比率は、82対18となっており、国県の政策に大きく左右されている(第3図)。そして極めて小さい財源を生かすため3ヶ年ローリング方式によって事業計画を進めている。しかし、その投資規模が小さいため、そして限定された方法で行われるため、その効果が現れるには、かなり他



第3図 自主財源と依存財源

地域より遅れをとっている。現在、進められている主なものは、共同放牧場2ヶ所、折腰川流域に宅地分譲、孵化場の設置などである。また昭和56年度までには、竜飛崎から小泊までの道路完成を目ざし、また昭和57年度には、青函トンネルの完成が目前にせまっている状況であり、その対応が緊急の課題となってくるであろう。

### (3)産業構造

各産業の就業人口を見ると、50年国勢調査を基に、40年と比較してみると、総就業人口2,136人中、第1次産業53.0%、第2次産業16.9%、第3次産業29.7%であり、40年に比較して第1次産業が、15.1%の低下を示している。

表 6 〔小泊村〕

区 分 項 目	40 年 度		50 年 度	
	生産所得額	構成比	生産所得額	構成比
1. 農 業 業	3 0	4.3	8 4	2.4
2. 林 業	1 2 7	18.1	1 7 5	4.9
3. 水 産 業	2 3 3	33.1	1,1 2 3	31.6
4. 鉱 業	—	—	—	—
5. 建 設 業	5 4	7.7	2 5 2	7.1
6. 製 造 業	2 4	3.4	2 1 5	6.0
7. 卸・小売業	5 5	3.6	2 5 4	7.1
8. 金融・保険 不動産業	3 3	4.7	4 3 4	12.2
9. 運輸・通信 公益事業	2 5	3.6	1 4 2	4.0
10. サービス業	1 0 3	15.4	6 3 8	17.9
11. 公 務	1 9	2.6	2 3 8	6.8
分 類 不 能	2 5	3.5	—	—
市町村内純生産 (要素費用表示)	7 0 3	100.0	3,5 5 5	100.0

一方、総純生産額で見ると、50年の総純生産額35億5,568万円で第1次産業は、40年に比べ18.7%低下して、38.9%となった。それに対し、第2次産業は、40年に比べ6.0倍伸び48.0%の構成比を占めまた、第3次産業は、8.1%伸び、13.1%となった。また村民1人当りの純生産額は、

600,925円で、県平均862,205円で、26万円ほど低い。

### (3)観 光

当村は、昭和50年3月に津軽国定公園に指定され、また小泊崎を中心に景色は、絶景を呈している。それにもかかわらず、観光設備と交通状況などの観光資源利用の便が、それほど整っていないのは、環境保護、特に漁場保護のために、ある意味で意識的に行われている様である。現在当村では、旅館6、民宿6であり、民宿は全て国定公園指定後に作られたものである。そして、そのほとんどが、小泊地区に集中している。

昭和51年度の観光者数は、総数25万人（男69%、女31%）であった。県内と県外の比率では、75%が県内からのものが占め、県外の9%は、東京から来た人で占められている。季節においては、春から晩夏までで、特に7～8月で、その大半を占め、9月中旬を過ぎるとほとんど、客足はとまってしまう。

今後、竜飛からのルートが開発されるに至ったならば、現在の観光対策においても、もっと熱心にとり組まなければいけないだろうが、特に観光に関係している業者においては、現在行われている観光漁業のみならず、その方面の分野を広げるとともに、その客に対するサ

ービスの面でも（質の向上のためにも），もっと研究する必要があるものと考えられる。それには，東京からのマイカー利用の客などが増えることなど，観光客の多様化に伴って，その方面でのサービス部門の拡充も必要となるだろう。そのためにも，環境保護の見地から役場との協力によって，進められることが望ましいものと考えられる。

## 2. 農 業

### (1) 概 況

本村の農業環境は気象的には年間平均気温 12.3℃，降雨量 1,268mm と比較的気温も高く降水量も多いが，農作物の生育期である 3 月～9 月にかけて偏東風が吹き，気温が低くめぐまれている。

また地質については，小泊本村は玄武岩を基岩とした流紋岩でしめられ，権現崎地域は凝灰岩・安山岩などからなっており，表土もうすく耕地としては適していない。

一方農用地は水田 48.2ha，畑 22.0ha，牧草地 2.9ha と全面積 6,478ha の 1.1% にすぎず，水田は小泊川流域にのみ分布し，畑は各集落と国有林に囲まれた丘陵地帯に散在している。なお樹園地は全く存在しない。

### (2) 農家戸数と農家人口

農家戸数は昭和40年 461 戸から昭和50年には 209 戸と急激に減少しており（減少率 54.7 %），農業人口も同様昭和40年 2,815 人から昭和50年 1,091 人と急激な減少を示している。（減少率 61.2 %）また一世帯あたりの人口も昭和35年の 5.6 人から昭和50年には 4.4 人となっている。この農家人口の減少は核家族化・休耕・若年労働力の流出などによるものと思われる。さらに専業農家数も年々減少し，昭和50年現在では農家戸数 209 戸のうちわずか 1 戸（0.5 %）にすぎず，他の 208 戸はすべて兼業農家であり，特に第 2 種兼業農家が多い。この兼業農家の兼業職種は恒常的勤務者が 20% にも満たず，そのほとんどが出稼ぎ，漁業人夫，日雇によってしめられており不安定なものが多い。

表 7 農家人口及び専業・兼業別農家戸数の推移

区分 年次	農家人口	農家戸数	内 訳		
			専 業	1 種兼業	2 種兼業
4 0	2,815	461	15	20	426
4 5	2,168	392	5	8	379
5 0	2,091	209	1	—	—

農家人口は1,091人で村の総人口5,917人の18.4%をしめ男女別の構成はほとんど等しい。

16才以上の世帯員数は昭和50年現在775人（農家人口の71.0%）でその就業状態は何らかの形で農業に携わっている人は535人と16才以上の世帯員数の69.0%をしめている。さらに自家農業に従事した人は261人となっており、これを男女別にみると男25人、女236人となっており、当村の農家労働力は女性に大きく依存していることを物語っている。これは昭和45年と比較して約半分でしかも女性化率90.4%（県平均62.7%）、老齢化率38.3%（県平均21.9%）といずれも県平均を大幅に上回っており農業従事者の老齢化・女性化がめだっている。基幹的農業従事者は農業就業人口の33.6%にあたる261人となっており、前述同様女性の占める割合は大きい。

表8 農 業 就 業 者

区分	総 数	16～29			30～64			65～		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
4 0	1,781	298	282	580	455	516	971	110	120	230
4 5	1,489	233	200	433	378	427	805	114	137	251
5 0	775	121	99	220	203	227	430	50	75	125

表9 基本的農業従事者数

区分	総 数	16～29			30～64			65～		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
4 0	515	4	105	109	15	325	340	20	46	66
4 5	483	1	84	85	8	287	295	24	79	103
5 0	261	4	38	42	9	157	166	12	41	53

### (3)経営耕地面積広狭別農家数

耕地面積の推移をみると昭和40年代前半における開田ブームにより開墾が行われ、多少なりとも水田が増加したがその後道路用地・宅地化などにより減少しており、最近では年に1haの割合で減少している。普通畑も年々減少し、昭和40年69.6haであったのが昭和50年には22.0haと1/3以下になっている。これは畑の大部分が山の急斜面にあり生産性も低く、耕地放棄状態にあるため、今後もこの傾向は続くと思われる。

農家一戸あたりの耕地面積は 0.35ha で県平均 1.23ha を大幅に下回っているが農家数の減少により若干ではあるが規模拡大されている。さらに経営規模別農家数をみると、2 ha 未満の農家が 208戸で全農家数の 99.5 %を占め、経営規模は零細ではあるが、昭和40年に比較して 0.7 ha 未満の階層が257戸減少し、0.7 ha 以上の階層が4戸増加している。このように自然条件からみても外延的規模拡大、離農の促進による経営規模拡大を望めない当村にあって生産性の高い農業を営むためには営農集団を組織し、協業化・機械化・作業受託等によりできるだけ効率化を図る必要がある。

表10 経営耕地面積の推移 (ha)

区分 年次	経営耕地 面積	左 の 内 訳				
		田	畑			計
			普通畑	牧草地	樹園地	
4 0	116.81	47.19	69.62			116.81
4 5	107.05	59.19	55.08			107.05
5 0	73.16	48.24	22.01	2.91		73.16

区分 年次	農家戸数	耕地面積	一戸当り 耕地面積	0.3ha 未満	0.3 0.7	0.7 1.0	1.0 1.5	1.5 2.0	2.0 2.5	2.5 以上
4 0	461	116.81	0.25	329	108	19	5			
4 5	392	107.05	0.27	264	104	18	5	1		
5 0	209	73.16	0.35	123	57	20	7		1	

#### (4)稲 作

水田は小泊川流域に分布しており、かんがい水はこの小泊川を利用しているが、水不足水害などの心配はほとんどない。

昭和50年の農業粗生産額 8,200 万円のうち米は 4,500 万円で全体の 54.9 %を占め、45年と比較して増加している。生産農業所得も昭和50年には 5,800 万円で昭和45年と比較してのびてはいるが県平均ののびよりは大幅に下回っている。しかし宅地化道路用地などの減反により、生産量は昭和45年 228 t から昭和50年には 172 t へと減少している。また10 a あたりの収量も 431 kg から 420 kg へと減少し、県平均 571 kg と比較してかなり下回っている。小泊村の農協は1つだけでは独立できず、市浦村の農協と共同で供米を扱っている。

#### (5)畑 作

昭和50年の農業粗生産額 8,200 万円のうち野菜は 2,700 万円で全体の 32.9 %を占め米に



ついでいる。小泊村の畑地は山間の急斜面に散在しているため耕作されずに放棄されているものが多く、自給的に栽培されているにすぎない。

作物別の産量をみるとダイコンが92 t、パレイショ32 t、キュウリ29 t、トマト17 t、ニンジン14 t、その他アズキ・ダイズが栽培されている。しかし最近では野菜類は五所川原などから買う傾向にありますます畑作は衰退している。

#### (6)今後の対策

本村の水田は小泊川流域にだけ分布しているが、細かく区分されているしまた畑地は山間に散在しているなど圃場・整備などの土地基盤の整備がおくれている。そこで56年度を目標に農道をつくり、区画整備を行う計画をたてている。また本村でも農業機械の導入が進められているが、個人所有の機械が多く、個人間で貸借を行っている。さらに農業従事者の高齢化・女性化がめだってきている点からも一貫した農作業体系の確立普及とともに積極的に農業機械の共有化を図る必要がある。

また小泊村は漁業が主であり農業はさかんでないため、農協は市浦村と共同でその支所が小泊村におかれている。そのため農協の組織は不十分であり、今後整備・強化が必要であるように思われる。

### 3. 畜産

#### (1)畜産の概観

小泊村における畜産の歴史は古く、天保年間から明治2年にかけて隆盛を遂げたといわれたが、その後漸減し、昭和29年の調査では皆無に近い状態となった。しかし近年、わづかずつではあるが飼養頭数はふえてきている。小泊村は平地面積が少なく、農業は平地を利用した米作と、急な山の斜面に切り開かれたわづかの畑作に限られているため、畜産の振興が望まれているが、現在、経営耕地面積に占める牧草地の比率は4%。農業粗生産額に占める畜産の比畜は10%に満たないわづかなものであり、いまだ副次的畜産から脱皮できない状態である。

#### (2)経営状態と経営形態

現在、商品として市場に出されているものは、肉用牛だけである。豚は、昭和45年には3戸で80頭いたが、48年には、3戸で12頭、50年には飼養されなくなり、乳牛も、50年には2戸で28頭飼養されていたが、市場に遠い、交通の便が悪いなどの理由から、現在では全く飼養されていない。鶏は現在わづかにいるが、これは自給的な、楽しみとしてのもので、商品的なものではない。肉用牛は昭和45年には27戸で66頭、50年には12戸で105頭、現在では10戸で240頭飼養されており、このうち30頭以上の農家が4戸ある。このように、年々、畜産

を行う農家は減少してきている。肉用牛飼養農家をみた場合、農家戸数は減ったが飼養頭数は増えており、1戸当りの飼養頭数が増えてきている。しかし、ほとんどは兼業農家である。品種としては黒毛和種が中心となっている。以上のように、小泊村における畜産は、肉用牛が主体をなしているのである。

肉用牛の飼育形態をみると、繁殖牛と子牛は夏山冬里の形式をとっており、夏（5月上旬～9月下旬）は国有林をかりうけ、草地造成を行い放牧を行ったり、また林間放牧も行われている。この間に、ダニ駆除の薬剤散布のため2回集められる。9月下旬になると村の近くの採草地につれてこられ、冬は里の牛舎ですぐす。また一方肥育牛は牛舎飼育であり、3才になると全量農協系統出荷により春と秋の年に2回行われる木造の牛市にだされるのである。

### (3)放牧組合

肉用牛を飼養している農家によって、放牧組合がつくられており、放牧共有林野の管理や、役場の補助を得て種牛の管理などを行っているが、小泊村と市浦村の合併した市浦村農業協同組合で昭和51年度よりスタートした。肉用牛肥育センター（694㎡）をはじめとし、各施設を整えた肉用牛肥育事業は、市浦村のみで小泊村は入っていないなど、協同化・組織化の遅れがみられる。

### (4)ある農家の事例

私達が聞きとりを行ったある農家の例をあげてみることにする。この農家は畜産を行っている農家では唯一の専業農家であり、夫婦と長男の3人が畜産に従事している。親牛25頭、子牛20頭、肥育牛40頭ほどを飼養しており、このうち親牛と子牛は、青岩北方の国有林をかりうけ放牧している。品種は全て黒毛和種である。飼料は放牧しているものは草であるが、牛舎ではわらが主体であり、それに配合飼料を混ぜて与えている。また今年から、デントコーンを1アールづくりはじめた。最近飼料が1トン当たり1万円ほど値上がりしたなど、飼養経費がかさむことが、悩みの点であるということであった。

### (5)畜産の問題点と今後の方向

飼料価格の上昇、放牧地がないためこれ以上頭数をふやせない、外国の安い肉がはいってきている、子牛の価格が高いなど、畜産にはいろいろな問題点がある。しかし、平坦地が少なく、米作・畑作にこれ以上の伸びが期待できない小泊村の場合、畜産の中でも特に肉用牛については、今後の伸びが期待されている。そのためには、デントコーンなどの飼料作物の作付けを増やす。未利用地の活用、特に総面積の87%を占める国有林地内の適地について検討し、草地造成・林間放牧地の利用など、飼料基盤の拡充を計るとともに、市浦村と協議し、市浦村管内の国有地の利用・人工受精の指導といった面からの検討が必要である。草地造成

などは実際に、2～3年後をめざしての計画がなされているということである。

小泊村の畜産においては肉用牛はまだのびる可能性を持っていると思われる。私達が聞き取りを行った農家のように、積極的に畜産に取り組んでいく農家が、1戸でも増えていくことが必要であろう。

#### 4. 林業

小泊村の地形は、山が海岸線までせまっており、平地が少ない。ここで当然、本村において林業の発達が考えられる。村の総面積は、6479 ha で、そのうち林野面積は、昭和50年では、5560 ha、全体の85.8%を占めている。

所有形態をみると、国有林は5318 ha で、全体の95.6%を占め、私有林237 ha、4.3%、公有林5 ha、0.1%となっており、国有林が圧倒的に多いということが特徴である。樹種は、針葉樹が主で、特にヒバが中心となっている。

##### (1) 国有林利用状況

本村の国有林は、市浦宮林署、増川宮林署で管理・運営されており、そのうちの87%は、市浦宮林署管内に含まれる。小泊村には、貯木場が設けられている。

小泊村の国有林蓄積量は、789千 $\text{m}^3$ となっており、全体の96.9%を占めている。樹種は針葉樹が8割を占め、ヒバ・スギ・クロマツ・カラマツが中心である。また広葉樹は、ブナ・イタヤ・ナラなどである。中でもヒバが中心で、樹齢150年位のものから伐採可能となるが、ヒバの伐採後、生長の速いスギを植えることもあるということで、次第にヒバが減少してきている。人工林率は低く、人工林の若齢化もみられる。しかし、本村では、まだ豊かな自然林の存在で、山林資源の枯渇は、それほど深刻化していないように思われる。

国有林の利用としては、水源涵養などの保安林としての利用と、一方、共有林野・部分林としての利用があげられる。共有林野は、放牧・採草の目的で、畜産振興の場として大きな役割を果たしており、部分林とともに、小泊村の経済にとって重要な位置を占めているものと思われる。部分林については、学校部分林、村部分林があるが、山村振興部分林組合による活動によって、部分林造成が行われている。小泊村は、国有林が95%以上も占めているのだから、地元経済の発展のために、国有林利用をさらに進める必要があると思われる。

##### (2) 林業の経営状況

国有林について言えば、小泊村において国有林伐採に従事している人は、14人程で、これらの人々は、季節労働者ではなく、常に国有林賃労働者として働いている。

また私有林についてみると、本村山林保有林家は56戸で、そのほとんどが5 ha未満と極めて零細規模である。ゆえに林業のみで自立することができず、農業・漁業を営む一方、林業

を営むという形をとっている。

仕事は機械化され、部分林組合を中心に、トラクター・チェンソーなどを導入しているが、導入台数が少ないため、経営形態は零細である。また林道の整備も遅れ、林道はすべて国管理の林道となっており、将来、林道の整備も望まれる。

### (3)林産物の需要と流通

小泊村の木材生産量は、16411 m<sup>3</sup>（昭和51年）であるが、これはすべて国有林材となっている。その内訳は、針葉樹が91.6％、広葉樹が8.4％となっており、国有林材として、32.2％は、地元の製材工場で消費される。これらの国有林は、入札により青森・市浦・小泊などへ送られ、製材業者の手に渡る。

小泊には製材所が2つある。その一方の場合をみると、木材はヒバが中心で、小泊村からは勿論、津軽・下北半島からの木材も加工している。木材は、柱や建材具等に加工され、金沢や東京方面への出荷が中心ということであった。

特殊林産物に関しては、まったく無く、地元経済にとって大いに期待できる可能性のあるものであるため、今後、充分検討されるべき問題と思われる。

### (4)林業の問題点と今後の方向

本村における林業は、ほとんどが国有林という立場の中で、零細に行われている。1戸当りの所有規模が小さく、労働力が不足し、機械化も遅れ、林道が未整備であるなど単独に林業を経営することは極めて難しい状態にある。

これらの実状をふまえ、部分林組合等が中心になり、国有林を有効に活用し、上に述べた問題を解決していく必要があると思われる。平地が少ないため、村の人口を増やし、林業の振興に力を入れようとしても、その人口を迎え入れる土地が得にくいし、既存の人口でのみ行おうとすれば、特に男子労働力は、ほとんどが漁業従事者であり、女子・老人の労働力で行わなければならないため、かなり困難なことと思われる。しかし、最近の漁業規制や減反などで、農漁業の発展が制限されてくることから、今後、林業は畜産との結びつき、特殊林産物の振興が行われれば、小泊村の発展を促す重要な産業となることと思う。

## 5. 水産業

### 1) 水産業の形態と就業人口

小泊村の水産業は、日本海北部地帯、津軽海峡を主漁場とした、釣・刺網、小型定置網を主とする沿岸漁業である。

就業人口についてみると、昭和53年現在998人（総就業人口の46.7％）で、48年の839人

と比較すると 159 人の増加を示している。当村の漁業経営体数は、昭和53年現在で総数 273（小泊 174・下前99）で、48年の 146 の約 2 倍と増加の傾向を示しており、すべて個人経営体である。専兼別でみると、専業漁家 129（小泊64・下前65）、兼業農家 144、そのうち第 1 種兼業87（小泊63・下前24）、第 2 種兼業57（小泊47・下前10）となっており、専業漁家と第 1 種兼業漁家を合計した漁業を主とする経営体が 216（78.6 %）で、経営体数の大部分を占めている。特に下前部落においては、それが90%と著しく高い。

表 11 階層別漁業経営体数

階層 年次	経営 体 総 数	漁 船 非 使 用	漁 船 使 用							小 型 定 置 網
			無 動 力 船 の み	動 力 船 使 用						
				1t 未 満	1 t 3t	3 t 5t	5 t 10t	10 t 20t	20t 以上	
48年	146			1	8	32	52	18	30	
53年	273		1	40	17	62	90	25	22	
増減	+127		+1	+40	+9	+30	+38	+7	-8	

表 12 事業別経営体数

	専兼別 総 数	専 業	兼 業	
			漁業が主	漁業が従
48 年	146	73	66	7
53 年	273	129	87	57
増 減	+127	+56	+21	+50

## 2) 漁港と漁業協同組合

小泊港は、北緯41度7分57秒、東経 140 度17分53秒に位置する第 4 種漁港（避難港）で、権現崎をはさみ小泊港、下前港の 2 港から形成されている。昭和26年に第 3 次漁港整備計画に基づく整備がはじまり、現在は第 6 次修築工事が、期間 6 年、総額52億円で施工されている。これが完成すると、その規模、機能において県下有数の近代漁港として水産振興にその役割を果たすことになる。

当村には、小泊漁業協同組合、下前漁業協同組合がある。小泊漁業協同組合は組合員数376人で、下前漁業協同組合は組合員数 574 人で、共に組合員による出資金で組織されている。事業としては、信用事業として貯金業務と貸付業務が行われ、購買事業として漁具、漁網、燃油等の購買、販売事業として受託販売で、生鮮魚貝類及び水産製品、加工品の販売が行わ

れており、その他、製氷事業と製氷販売事業、冷凍・冷蔵事業が行われている。また、指導事業として、漁礁設置計画、あわび放流事業、漁業権管理適正、技術研修の実施なども行われている。

### 3) 漁 船

53年現在すべての漁業経営体は動力船を使用しており、1 t未満の漁船においてもそのほとんどが、船外機をとりつけている。今日、漁場の遠隔化、魚群の枯渇により当村の漁船は、漁法技術や漁船設備の改善をせまられている。特に、漁船の大型化は急激に進んでおり、ここにも時代の流れが如実にあらわれている。

### 4) 漁獲数量及び漁獲金額

当村の漁獲数量は53年には4,402tで豊漁年であった51年と比較すると、3,700 t (46%)の減となっている。漁獲数量を漁種別にみると、魚類2,556 t (58%)、その他水産動物（イカ、タコ）1,269 t (29%)、藻類8.93 t (0.2%)、貝類2.1 t (—) となっている。これらのうち、主な漁獲物は、魚類にあっては、ます・めばる・さめで、その他の水産動物では、スルメイカとなっている。しかし、51年までの当村の漁業の柱であったスルメイカは、51年に比べ3653 tの減で、著しく減少しており、このために総漁獲量も著しく減少している。その他の魚類においても、資源の枯渇や乱獲によって漸次漁獲量も減少している。

漁獲金額についてみると、53年2,070,797千円で、51年と比較して、8億5千万円(29%)の減となっている。これを漁種別にみると、魚類1,037,223千円(50%)、その他水産動物838,859千円(40.5%)、藻類11,771千円(0.6%)、貝類352千円(—) となっている。

このように漁獲量の激減に比べて、漁獲金額の減少が小さいのは、魚価の高騰によるものと考えられる。

### 5) 問題点と今後の展望

日本の漁業全体に近年、水産資源の枯渇が叫ばれているが、当村もその例にもれず、特に、当村の水産業の柱となっているスルメイカ・ます・めばるはその乱獲により近年減少の傾向をたどっている。他の漁種も、水産会社によるトロール漁法や観光漁業により、減少している。その対策として、漁協が中心となって、あわびの放流や、わかめ、こんぶの養殖を試みているが、海が荒いなどのためにその結果はおもわしくない。

次に、今年（昭和54年）6月以来の燃料の問題があげられる。漁船はA重油を使用しているが、その価格が急激に上昇するとともに、大幅な不足にみまわれている。そのため7月には、石油対策会議が開かれ、①漁船の航海スピードを落とす、②元売業者や政府への陳述、③毎週金曜日を休漁日とする。これらのことが決定された。現在、これらの対策によってど

うにか操業しているが、今後の漁業の発展のためにも、この問題の早期解決が望まれる。

その他、漁船の大型化による膨大な設備投資（現在3 t以上の漁船は大部分無線レーダー、魚群探知機、自動探査などの機械を装備している。）に伴う借金返済の問題があげられる。これらの問題をかかえ、漁協や村もさまざまな対策を試みている。例えば、漁閑期をなくすために、11月からは油さめの操業、11月から1月まではスケソウの刺網が行われ、また、今年からはずわいがにの操業も試験的にはじめられ、その今後に大きな期待がよせられている。

今、当村の水産業は、大きな転換期をむかえており、さまざまな対策がこうじられているが、当村の水産業の将来は、決して楽観できないものであると思われる。

表13 漁種別漁獲数量（昭和53年）

区 分	数 量 (t)	金 額 (千円)
スルメイカ	1 1 2 2. 9	7 2 1 2 6 6
やりイカ	1 4 6. 8	1 1 7 5 9 3
ま す	1 0 5 7	3 7 8 2 6 6
め ば る	7 8 3. 9	5 3 6 0 5 6
あ わ び	2. 2	5 7 8 2
ひ ら め	2. 4	3 5 0 0
小 女 子	1 0 5	1 5 1 0 9
た い	1. 5	2 4 6 2
さ め	5 4 6	7 8 9 1 5
た ら	6 0	1 5 5 9 0
た こ	2. 2	3 5 2
そい・油目	1. 7	1 5 4 3
え ご	4. 7	1 0 0 8 7
こ ん ぶ	1. 7	9 9 9
わ か め	1. 7	6 3 2
天 草	0. 9 3	2 9
ス ル メ	0. 1	2 4
そ の 他	5 6 1. 8	1 8 2 5 9 2
合 計	4 4 0 2 t	2 0 7 0 7 9 7